

住・まちづくりフォーラム かわら版(仮題)

ニューズレター第1号 1993年11月20日



特集 第1回住教育フォーラム

- 田米の小学校における住教育比較
- 小学校での 子どものための建築教育の経験

発行／財団法人 住宅総合研究財団

第1回 住教育フォーラムの記録

(財)住宅総合研究財団 住教育委員会

当財団の住教育委員会では、楽しい経験をつむぎだしつつ、住み手（子ども）の住まい・環境への能動的な意識づくりの仕掛けについて検討を行うことになり、その第1回の集いを開きました。

今回は第1回目でもあり、不慣れな点もありましたが、内容は熱のこもったものになりました。

講師、小澤紀美子さんには、「建築と子どもたち 日米セミナー」などの活動を通して得られた実体験から、国際的視野に立っての比較と提言などを、多数の資料とスライドで、歯に衣着せぬ、まさに「歯切れの良い」お話をして頂きました。

もう一人の講師の山口明宏さんからは、「今後の日本の住環境を少しでもよくするのに結びつけよう」と、地元の大磯町で小学生に「建築」を教えている建築家。豊富な、かつ貴重な体験から問題・課題にも言及して頂きました。

講演の後は、ワーク・ショップ形式で、ファシリテーターの木下さん・町田さんが横5メートルにも及ぶ模造紙にイラストを交えながらの討議。ご参加の皆さん全員に質疑や意見を書いて頂き、それを使っての自由討議は熱意のこもったものとなり、大変好評でした。

初秋の屋下りのひととき、大いに語り合いました。

開催言記録

- ・日 時 9月16日(木) 午後 2時～午後5時30分
- ・会 場 当財団会議室
- ・講 演 1. 日米の小学校における住教育比較
東京学芸大学教授 小澤紀美子氏
2. 小学校での子どものための建築教育の経験
アステックインテリテイブ 代表 建築家 山口 明宏氏
- ・司 会 熊本大学教授 延藤 安弘氏
- ・ファシリテーター 千葉大学助手 木下 勇氏
筑波大学附属小学校講師 町田万里子氏
- ・記 録 跡見学園短期大学講師 加藤 仁美氏
- ・参会者 建築系・教育系などの研究者・実務者ならびに大学院生・学生
街づくりなどの活動家、関心のある主婦の方など37名

以 上



表紙デザイン
町田 万里子

日米の小学校における住教育比較

講演 東京学芸大学 教授 小澤 紀美子
(財団法人 住宅総合研究財団 住教育委員会委員)

まず、日本の学校教育における教育内容の決定過程を話し、次いで、住居を独立した教科として扱っている家庭科教育についての問題点及び課題を述べます。

さらに、現在注目されている環境教育に住教育が含まれると思われるので、まず環境教育とは何かを話し、引き続いて日本の環境教育の実態と、人工的な環境から学ぶ総合学習として位置づけられているアメリカの環境教育のなかの「建築と子ども協会のカリキュラム」についてお話しします。特にアメリカのカリキュラムについては、昨年と今年、アメリカで2回のワークショップを受けてきた内容と、アメリカの先生が昨年夏に来日して日本の学校現場で実施したカリキュラムをスライドで見せたいと思います。さらに、アメリカの子ども博物館における「まちや住まい」の教育の展示の内容や教育方法についてスライドで説明したいと思います。

1 教科書の内容とその策定過程

子どもたちが学校で使用している教科書の内容は、表1に示す流れで作成されます。まず、おおもとなるのが「教育課程審議会」で、約2年間の審議を経て答申が出され、そこで「教育で目指すべきねらい」が示されます(表2)。この4つのねらいが小・中・高校の学校教育の全教科の基本的方針になります。

この方針を受けて(実際は教育課程審議会の途中から始まっています)、教科書の具体的内容を規定する「学習指導要領」の策定協力者会議が始まり、約3年間の協議を経て、新学習指導要領として平成元年3月に告示されました。この学習指導要領の内容を受けて、教育課程(小・中・高校)別・教科別の教師の研修が行われたり、教科書の移行措置のプロセスを経て、教科書の改定・検定が進み、各教育課程別に新しい教育内容が実地されるのです。小学校は平成4年4月、中学校は平成5年、高校は来年から実施です。

現在の学校教育で住環境教育にかかわりをもつ教科には、家庭科、社会科、理科、保健、美術があります。その中で一領域を構成し、展開しているのが家庭科です。

表1 学校教育の流れ：教育内容決定の仕組み

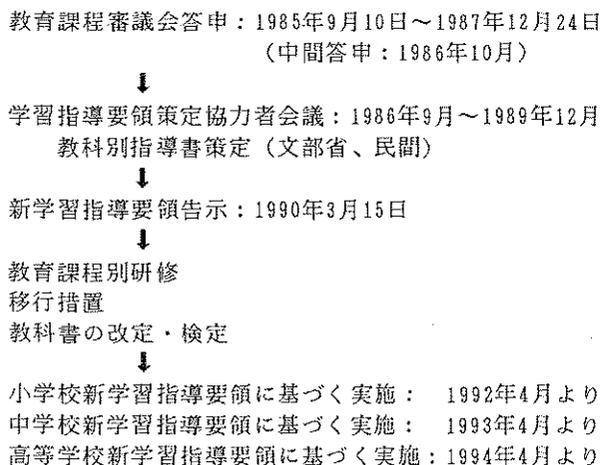


表3に小・中・高校(家庭一般)の学習指導要領の内容を示してあります。

小学校では男女ともに5、6年生で家庭科を学びます。しかし、その内容は「家族の生活と住居」という領域で展開され、小学校5年生では「室内の整理・整頓や清掃」を、6年生では「室内環境」としての換気、暖房器具の扱い方、採光や照明、騒音などを学びます。

中学校は今年から男子も学びますが、選択領域となっていますので履修されない可能性もあります。内容は表3を参照下さい。なお、中学校では新しく「家庭生活」という領域が設定されています。そこでは「家庭生活と地域の関係を考えさせる」として地域の美化や近隣騒音を考えさせる内容となっていますので、都市における居住形態としての共同住宅における住まい方なども取扱いが可能です。

この領域は男女ともに学ぶものです。

私自身、中学校の住居領域の学習指導要領策定協力委員として3年間やってきたのですが、いろいろな視点が入る方がよいので、一切教科書の執筆は行っておりません。

高校は来年より男子も学ぶことになっていますので、住居領域を履修する生徒が増えることを期待したいと思います。

なお、小学校は昨年より新しい学習指導要領で実施されていますが、そこでいちばん変化したのが、「生活科」という領域の新設です。小学校1、2年生の理科と社会科の合科として発足しています。認識の未分化な段階にある低学年において知識を与える教育ではなく、活動を重視した体験学習の積み重ねから子どもたちの感性を育もうとする教科です。公園で遊ぶ、まちを探検するなどの活動を通して子どもたちの感性を高めていくねらいをもった教科です。さらに3年生の地域の学習につながる内容となっています。

2 家庭科における住教育の問題点

学校の家庭科で行われている住教育の問題点としては

表2 教育で目指すべきねらい

- 答申では、「21世紀に向かって、国際社会に生きる日本人を育成する」という観点に立ち、社会の変化に伴う生徒の生活や意識の変容への配慮のもとに、次のようなねらいの達成を目指すことが示されています。
- (1) 豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること。
 - (2) 自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること。
 - (3) 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること。
 - (4) 国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること。

表3 学習指導要領

◆小学校 家庭科

1 目標

- (3) 家庭における家族の生活を理解し、快適な住まい方や計画的な生活を工夫することができるようにするとともに、協力して家庭生活をよりよくしようとする態度を育てる。

2 内容

(第5学年)

C 家族の生活と住居

- (1) 家庭における家族の仕事や役割が分かり、家族の一員として家庭の仕事に協力できるようにする。
 ア 家族の仕事や役割が分かり、自分の立場や役割について考えること。
 イ 自分の分担する仕事を工夫してできること。
- (2) 身の回りの整理・整とんや清掃の適切な仕方が分かり、気持ちよく住むことができるようにする。
 ア 収納の仕方を工夫し、自分の持ち物の整理・整とんができること。
 イ 材質や汚れに応じて適切な清掃ができること。
- (3) 身の回りの品物について活用の仕方が分かり、不用品やごみを適切に処理できるようにする。

(第6学年)

C 家族の生活と住居

- (1) 団らんや仕事など生活時間の有効な使い方を工夫し、家庭生活に協力できるようにする。
- (2) 買物の仕方や金銭の使い方などが分かり、計画的に生活する必要があることを理解できるようにする。
 ア 物の選び方や買い方を考えて、適切に購入することができること。
 イ 金銭の使い方と記録の仕方を工夫すること。
- (3) 住居の働きが分かり、快適で安全な住まい方を工夫することができるようにする。
 ア 気候の変化に対する住居や住まい方の工夫が分かり、換気をしたり暖房用具を安全に扱ったりすることができること。
 イ 採光のための工夫や照明の仕方が分かること。
 ウ 近隣の人々の生活を考え、環境を清潔にしたり騒音を防止したりする必要性が分かること。
- (4) 家族の生活に役立つ簡単な物を布などを用いて製作し、活用できるようにする。

◆中学校 家庭科

J 住居

1 目標

住空間の計画及び室内環境と設備に関する学習を通して、快適な住まい方について理解させ、住空間を適切に活用する能力を養う。

2 内容

- (1) 家族の生活と住居との関連及び快適な住まい方について理解させる。
 (2) 住空間の計画について、次の事項を指導する。

- イ 食事、団らんなどに必要な家具の使いやすしい形状と寸法を知り、その配置及び空間の使い方の工夫ができること。
- (3) 室内環境と設備について、次の事項を指導する。
 ア 安全で衛生的な室内の整備の工夫ができること。
 イ 室内の空気調節及び騒音防止の仕方を知り、住まい方の工夫ができること。
- (4) 家庭生活における資源の適切な使い方と廃棄物の処理について考えさせる。

◆高校：家庭—Ⅰ般

(5) 住生活の設計と住居の管理

家庭生活を営む場としての住居の機能を理解させ、住生活を快適で機能的に営むことができる能力と実践的態度を育てることをねらいとしている。

A 住居の機能と住生活の設計

(ア) 住生活と社会

戦後の日本の住生活の変遷と現状などから住宅問題を取り扱い、今後の住生活の方向を考えさせる。また、住みやすさは住居の内部だけでなく周囲の環境とも深いかわりをもつことを理解させ、生活環境の改善のためには地域の住民の参加と協力が必要であることを認識させる。

(イ) 住居の機能

住居は、休養と睡眠、団らん、食事、家事労働など、人間の生活行為の器として必要な諸条件をもつことを理解させる。また、住居の機能は、家族形態やライフスタイル、気候風土や地域文化によっても異なることを理解させる。

(ウ) 住生活の設計

快適で機能的な住生活を営むためには、各室の機能と配置、広さ、居住様式及び施設・設備と効率などについて考慮する必要があることを理解させ、種々の家族形態、ライフスタイルを想定した平面計画を考えさせる。また、住宅の平面図が読み取れるようにする。

イ 居住性と住居の管理

(ア) 住居の衛生と安全

健康で快適な住生活を営むために、衛生的で安全な住まい方を工夫することができるようにする。住居の衛生については、日照、採光、照明、通風、換気、防湿、しゃ音、冷暖房などの在り方を理解させるとともに、結露、かび、衛生害虫、空気汚染なども取り扱う。

また、住居の安全については、自然的災害、人為的災害に対する対策を理解させるとともに、住居内だけでなく近隣社会及び集合住宅などにおける配慮も必要であることに触れる。

(イ) 住居の管理

住居は計画的な維持管理が必要であり、住宅の種類や所有形態で管理の方法、経費、責任の所在などが異なることを理解させる。また、ライフステージや社会環境に対応して住生活を改善工夫することが必要であることを認識させる。

(ウ) 室内整備の計画と美化

使用目的に応じた設備、家具及び生活用品の整理と収納について理解させる。美的要素と機能的要素の面から室内整備の計画を扱い、各室の使用目的や機能に応じた室内装飾と美化の工夫ができるようにする。

以下の諸点が上げられます。

○指導されている内容の不足、偏り、小・中・高校における重複。住まいの管理や室内環境（室内気候）に重点が置かれ、生活者と住まいのかかわり、物的水準、住まいをとりまく居住環境とのかかわり、などの視点が乏しい。

○家庭科という教科の性格上、工夫・やり方・製作（設計）が中心の内容展開となっていて、住まいに関する知識を受容する指導。

○住領域の指導は学習した事をすぐ現実の生活にいかすことが困難で、さらに児童・生徒の住宅事情が同じでないために教材として何を取り上げるか、難しい、という現場の教員の声が多い。

○教師自身、大学の教育で住居領域を十分に履修していないために、専門知識や技術が不足し、住領域への関心が薄く、また指導できる教材研究も十分にできない。

○他領域の内容と異なって住居領域の教材は画一的であり、児童・生徒の興味・関心を引き出せない。

○小・中・高校の教師の住居領域指導の熱意が低く、他領域の実習、製作の時間不足を住領域へしわ寄せする傾向にあります。

○今年から中学校の家庭科は男子も学ぶ教科となったのですが、住居領域は選択のため、小学校で住居を学ぶだけで終わってしまう子どもが出てくる可能性が高い。

3 環境教育について

地球環境問題のクローズアップにともなって環境教育が注目をあびてきています。持続可能な社会や生活様式の醸成のためには、啓蒙や教育によってかけがえのない地球や身近な環境に対する意識や価値観を変革し、豊かな感性や見識をもつづくりこそ、環境問題解決の確実な方法といわれています。

1972年、ストックホルムで開催された国連人間環境会議が環境教育の国際的な広がりのおきかけとなったので

表4 ベオグラード憲章（1975年）

[定義]

環境とそれにかかわる問題に気づき、関心を持つとともに、当面する問題の解決や新しい問題の発生を未然に防止するために、個人及び集団として必要な知識、技能、態度、意欲、実行力などを身につけた世界の人々を育てることにある。

[ねらい]

- ①関心：全環境とそれにかかわる問題に対する関心と感受性を身につけること
- ②知識：全環境とそれにかかわる問題、及び人間の環境に対する厳しい責任や使命についての基本的な理解を身につけること
- ③態度：社会的価値や環境に対する強い感受性、環境の保護と改善に積極的に参加する意欲などを身につけること
- ④技能：環境問題を解決するための技能を身につけること
- ⑤評価能力：環境状況の測定や教育のプログラムを生態学的・政治的・経済的・社会的・美的・その他の教育的見地に立って評価できること
- ⑥参加：環境問題を解決するための行動を確実にするために、環境問題に関する責任と態度の緊急性についての認識を深めること

ず。環境教育は自然保護教育が始まりといわれていますが、環境教育は、「人間をとりまく自然及び人為的環境と人間との関係を取り上げ、その中で人口、汚染、資源の配分と枯渇、自然保護、運輸、技術、都市と田舎の開発計画が、人間環境に対して度のようなかかわりを持つかを理解させる教育のプロセスである」（アメリカ合衆国環境教育法、1970年）、と述べられていますように環境教育は単なる自然を保護するための教育ではありません。

一般的、環境教育のねらいを明確にし、その理念の準拠すべき枠組みとして用いられていますのが、1975年に開催された国際環境教育会議で採択された「ベオグラード憲章」です。この憲章では、表4に示す6項目をねらいとしています。単に知識や関心をもつにとどまらず、価値観や意識の変革をせまり、自律的に生活を組み立てて行くための主体性を確立していかなければ、良好な人工環境としての住まい・まちづくりは達成されない事になると思います。

日本における環境教育は環境庁が1988（昭和63）年に「環境教育懇談会報告書」を出し、先進的に進めていました。文部省が本格的に取り組み始めたのは、1990年9月からの中・高校教師向け「環境教育指導資料」策定です。この指導資料は1991年6月に発行され、その年の11月には文部省主催の「第1回 環境教育シンポジウム」が滋賀県で開催されました。全国から700名近くの指導主事、校長、教員が集まり、環境教育に対する学校の高い関心をかいまみる事ができました。

翌年7月には小学校の教師向け「環境教育指導資料」が作成・出版され、その後、地方の教育センターなどで教師向けの研修が実施され、児童・生徒向けの副読本が作成されるなど、学校教育における環境教育が活発化してきています。

文部省では環境教育のねらいをベオグラード憲章に準拠して、表5に示す内容をかかげています。さらに環境教育の指導を通して身につけたい能力・態度として表6

表5 文部省の環境教育のねらい

[定義]

環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間活動と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上で、環境の保全に配慮した望ましい働きかけのできる技能や思考力・判断力を身につけ、よりよい環境の創造活動に主体的に参加し、環境への責任ある行動がとれる態度を育成する

表6 環境教育の指導を通して身につけたい能力・態度

1. 身につけたい能力
 - ①問題解決能力
 - ②数理的能力
 - ③情報処理能力
 - ④コミュニケーション能力
 - ⑤環境を評価する能力
2. 身につけたい態度
 - ①自然や社会事象に対する関心・意欲・態度
 - ②主体的思考
 - ③社会的態度
 - ④他人の信念や意見に対する寛容

に示す内容をかかげています。こうしたねらいにもかかわらず、日本の環境教育では自然や自然保護を題材としたものが多く、また知識をあたえたり、関心をもたせるだけの指導でおわっていることが多いようです。

欧米の環境教育が人工的な環境をも題材として、「環境を学ぶとともに、環境から学ぶ」という観点から、体験的・総合的学習方法がとられているのと大きな違いがあります。

4 人工的な環境から学ぶ

環境問題が解決されるのは、この地球上に人類が減びたときである、といわれています。つまり環境問題の解決の視点は、「あらゆる存在は、自然の中において共生し、循環するシステムの中に生きる」という認識にたち人間の諸活動が地球生態系のメカニズムを破壊しないようにしていくことが求められているのです。

そこで環境教育の内容や指導方法にもそうした視点が必要となります。つまり、人工的な環境を生態系を破壊しないようにするためには、どう「つくる」かといった視点からの内容が環境教育において重要な視点となります。

日本の環境教育で欠落しているのが、人間のつくりだした人工的な環境である「建築」や「都市」を学習対象とし、さらに教科の枠をとりはらって体験をとり入れる学習方法です。建築や都市は数学・科学・社会・歴史・芸術などを総合したところから創り出されたものであるため、学際的な学習態度を増進させたり、高度な思考力と創造力を養うのに適切な題材といえまう。さらに自然環境と人工的な環境との調和という視点からも重要な課題を含んでいるといえます。

欧米の環境教育にはこうした視点からのカリキュラム開発や実践が多くとり入れられています。例えば、ニューメキシコ大学のアン・テラー博士らが中心となって開発した「建築と子どもカリキュラム」は教科の枠をこえて体験を中心にした総合学習で、問題解決を通して子どもたちの個性、積極性、創造性を伸ばすことをめざしている環境教育です。

1984年アン・テラー博士らを中心にプロジェクトが組まれて開発されたカリキュラムで、アメリカ合衆国の5つの州で取り入れられております。全米で約千人の教師が「建築と子ども協会」やワシントン州立大学で研修を受け、そのカリキュラムの内容は公立学校で実践されています。

カリキュラムは18枚のポスターにまとめられていて、その中の15枚が独立した単元として構成されています。子どもたちはコンセプトの視覚化、建築設計のプロセスにおける方法、問題解決の原理をとり入れたカリキュラム構成で、思考だけでなく手作業、価値の表明、外の建物ウォッチング等の活動を通して学ぶようになっていきます。

こうした教育方法によって子どもたちはこれまでとは異なる学習様式を身につけるといわれています。「子どもたちが世界の建築のデザイン過程をまねて、発見し体験していくことは、建築というものが数学・科学・社会・歴史・芸術などを総合しているがゆえに、学際的な学習態度を増進することになります。さらに建築のもつ造形性はまた、話す言葉が違うもの間にある視覚的な共通言語を子どもたちに気づかせる」と言われています。

いくつかのポスターを簡単に翻訳して、事例として資料にお示ししています。

空間を想像して描いたり、必要な機能の関連を考えるとき、建築家ははじめに円や泡の形で表現して考えをまとめていきます。このような「バブルダイアグラム」の手法を学びますと、子どもたちは考えや視覚的表現力をつけていきます（資料1参照）。

同様に「玄関を設計しよう」「インテリアデザイナーになろう」

「公園のデザインをしよう」など現行の学校のカリキュラムにも応用可能な事例を資料としてあげてみました（資料2・3・4）。

では、どうしてこういうカリキュラムが学際的で総合的な学習といえるのでしょうか。

例えば、「建築の構造」という単元では（資料5）、「子どもたちが市から公共建築物の設計を依頼された」という想定で、「土地の条件や歴史的な視点から公共施設のあり方や形態を調べ」（社会科）、「イメージをスケッチし」（美術）、「体を使って建築の構造形式をまね、力の釣合と力の性質を学び」（理科）、「模型づくりで空間のボリュームをさぐり」（美術、算数）、「正確な立体図と平面図の縮尺図を作成し」（算数）、「現実のまちで建物を確かめ、その歴史的背景を知る」（社会、美術）などの作業や活動が内包されています。

そこで、こうした作業を通して「新しい概念を把握し作品の意図を説明したり、総合に評価することを通して複眼的な認識とコミュニケーションの力」（国語）が培われるのです。

このカリキュラムの展開は教室だけでは不可能です。子どもたちをまちに連れ出し、建築歴史家による都市や建物の見方の学習もすることが必要となります。

こうした教育の理念を取り入れているものには、「まちづくりゲーム」という手法があり、イギリスやアメリカで展開されているカリキュラムです。

5 子どもの体験学習の場の充実

アメリカのボストンにある子ども博物館では、日本から移築された京都の町屋や路地が再現されていて（写真1）、子どもたちが自由に家に中に入って引き出しをあげたり、障子やふすまを開閉できるように展示されています（写真2）。これは異文化である日本の生活様式や建築様式を体験できる仕組みの展示ですが、自国の都市を子どもの目線で体験できる仕組みがアメリカの子ども博物館にはあるといえます。

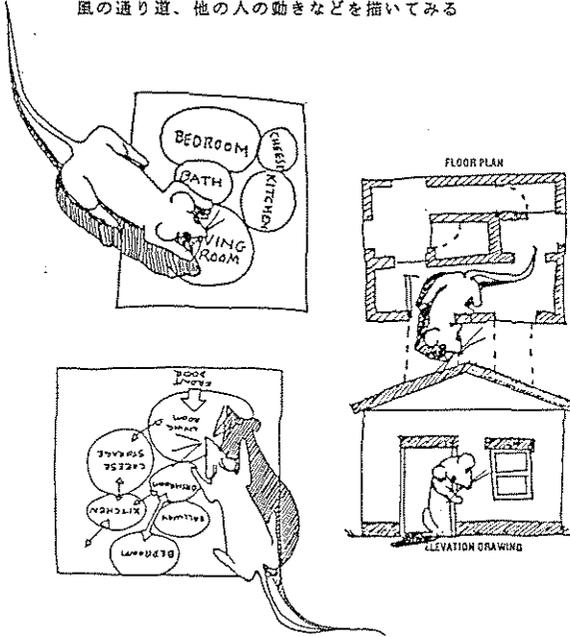
例えば、ロスアンゼルスの子どもの博物館では、町並みが再現されていて（写真3）、有名なバスケット選手の等身大の写真が展示されています。子どもの身長と比較できるようになっていたり（写真4）、地面の中の排水管の実物が地下の仕組みが目で見えて、入ってみて体験できるように展示されています（写真5）。

欧米では博物館という施設だけでなく、まち全体や都市の歴史的地域を体験学習の場として活用する仕組みもつくられているといえます。最近、日本でも地方自治体による博物館の建設が盛んに行われるようになってきていますが、建物はお金をかけ立派であるが内容が子どもの学習の視点から配慮されたものが少ないといえます。特に体験学習性が低いのが難点です。

コンピュータを用いた疑似体験学習の場はあっても、

資料 1

- 1) 自分がネズミになったつもりで住居を想像する
- 2) 必要な空間を泡の形でつくる
- 3) それぞれの空間のつながりを考え、矢印でつなぐ
矢印は住居の中を移動するネズミの動きをあらわしている
- 4) ネズミの住居の間取りをバブルダイヤグラムで描く
- 5) どこにキッチン、玄関ホール、寝室、居間、浴室、チーズ貯蔵庫があったらよいか示す
- 6) 描いた図の用紙の上にトレーシングペーパーをのせて、風の通り道、他の人の動きなどを描いてみる

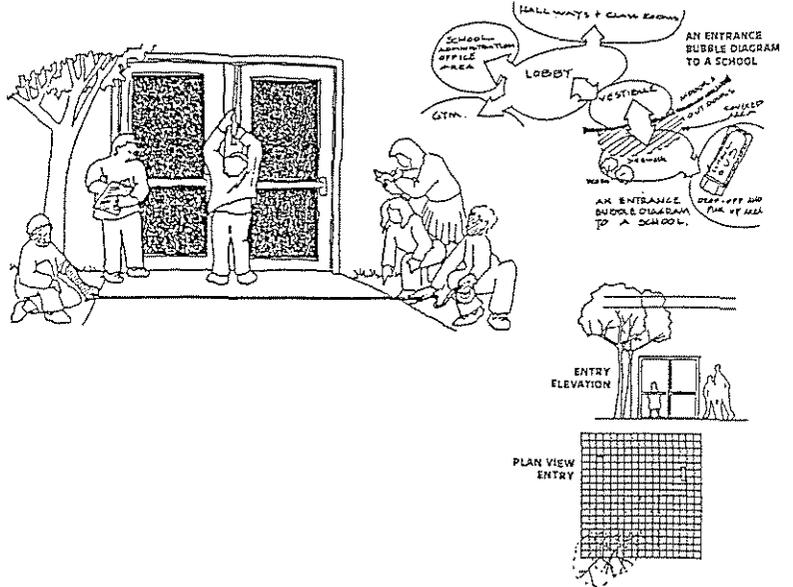
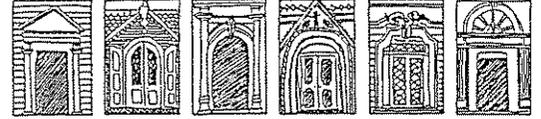


資料 2

7 玄関を設計しよう

☆ 画用紙 ペン

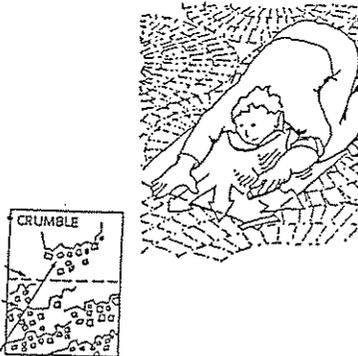
- 1) 玄関を表現する言葉をたくさん書いて下さい
- 2) 玄関の機能を表す言葉を書いて下さい
- 3) 事前に用意したさまざまな玄関の写真を見せ、評価（好きーきらい）させる
- 4) 玄関を構成する建築のエレメントをあげさせる
- 5) その形を描いてみる一形の分解
- 6) ネズミの住居の玄関のデザインの条件を考える
バブルダイヤグラムで考える
- 7) ネズミの住居の理想の玄関を立面図で描いてみよう



資料 3

8 インテリアデザイナーになろう（色とテクスチャの応用ができる）

☆ 古雑誌、はさみ、のり、くれよん、もぞう紙、えんぴつ、薄い上質紙、マスキングテープ、マーカーサインペン



資料 4

公園をデザインしよう

1. 図面を描いてみる… 空間を量的に正確に把握する
空間の相対化と客観化は人間成長に欠かせません。
2. 遊びや道具の記録… 写真による記録と分析、カメラの原理とおもしろさ
視覚伝達の原理が分かります。
3. 資料集め… 聞き取り、観察、文献、公園課のおじさんのお話
自分たち以外の人の考えを知ります。
4. データの整理… 機能図、アンケート集計、多数と少数、
概念を図式化して把握できるようになります。
5. データ分析… 安全と危険、遊びに対応する空間と道具の割り出し
演繹的、帰納的思考の訓練になります。
公園の樹木を調べる… 木の特徴と役割
6. デザインチーム… グループに分かれて道具や施設のデザインを担当する
データに基づいて協同して問題を解決します。
7. アイデアを出し合う… めいめいのスケッチはスケールを描える
同じデータでもイメージは各人違います。
8. 景観を考える… 簡単な模型をつかってどんな場所になるか考える
美しさ、楽しさのような感性についての訓練です。
9. 全体デザインを完成する… 全グループの模型と図面をつなぎあわせる
みんなで評価する…

資料 5

STRUCTURE IN ARCHITECTURE（建物の仕組みを調べよう）

- GOAL（目標）はこの課題で何をすることが示されています。この例ではスペース・フレームの屋根のついたピクニック・テーブルをデザインします。
- CLIENT（注文者）状況とか要求の設定です。ここでは市中の公園にスペース・フレームの屋根付きピクニック・テーブルを設置するという市の計画に子供たちのアイデア協力が要請されたという設定です。
- ARCHITECTURAL PROGRAM（作業プログラム）教室での仕事の分組、進め方、データの扱い方などの説明です。
- EVALUATION（評価）完成した作品を評価する基準、方法などです。この他、CONCEPT-この課題で子供たちにマスターさせる概念、MATERIAL 授業に必要な用具と材料なども説明されています。



写真1

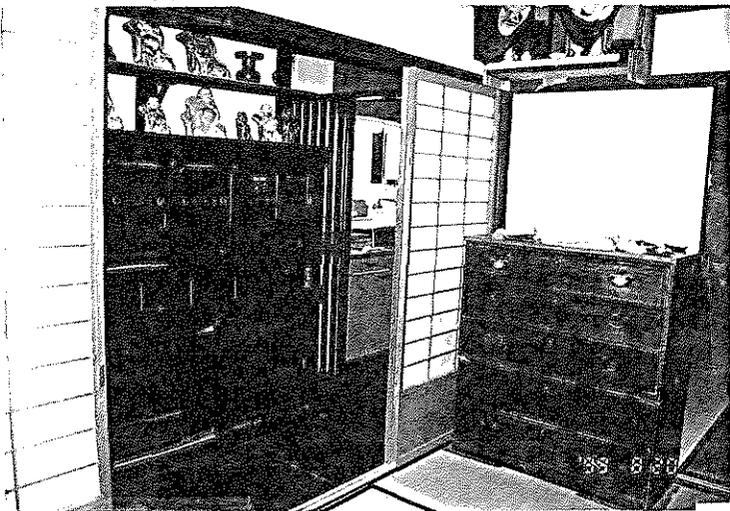


写真2



写真3

実物や素材を与えて子どもの視点から活動し、学ぶ博物館は少ないといえます。「さわるな！」と表示されている上に、内容を子どもが興味を持つように説明する学芸員すらいない場合が多いのです。

アメリカの博物館では倉庫であった建物を利用し（写真6）、展示方法やスタッフの対応の柔軟性が配慮されています。日本の博物館にも、人工的環境を学ぶ内容の展示と、子どもたちの体験学習の場として活用されるた

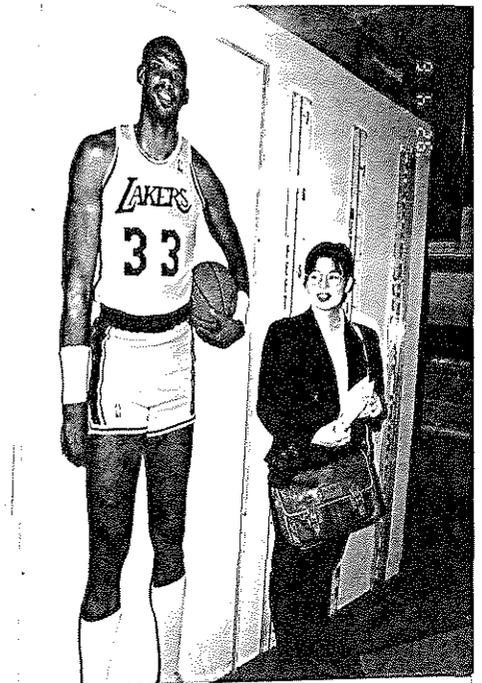


写真4

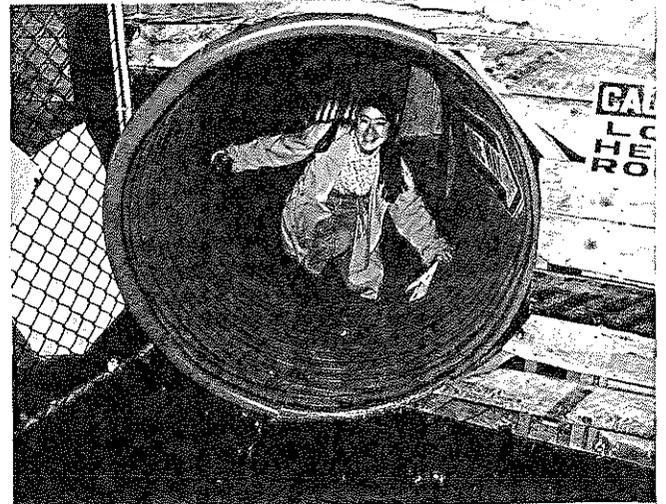


写真5



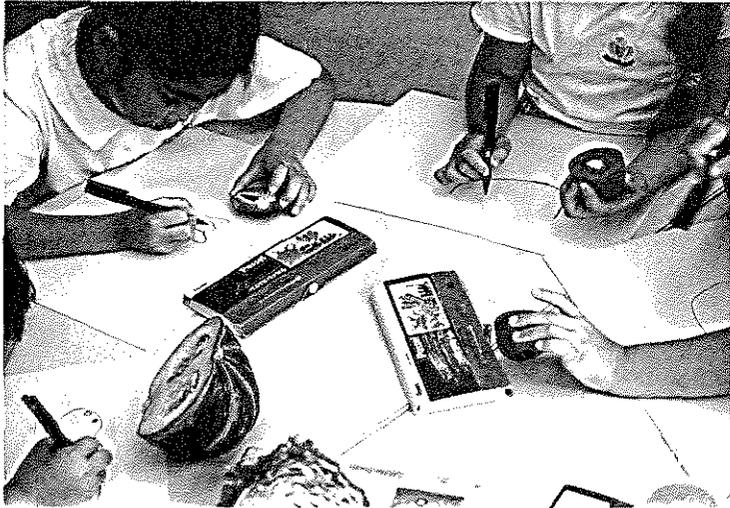
写真6

めにはソフトに金と力がかかることが不可欠です。こうした住教育フォーラムの成果を世に示すことによって改善されていくことを期待したいと思います。

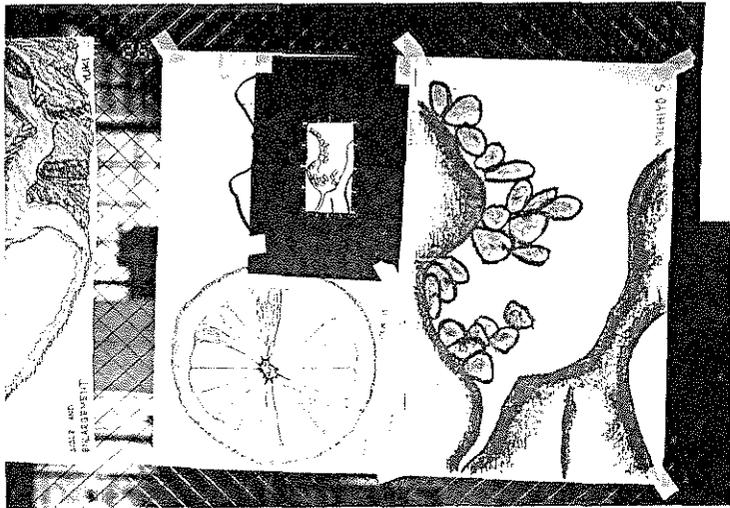
6 建築と子どもカリキュラムの実際

(スライドによる説明)

次に、スライドでアメリカで行われている教育の現場とそれを日本で実施したときのもの、及びアメリカでワークショップを受けたときの様子を示したいと思います。スライド1・2:「概念の視覚化のための演習」で、果物や野菜の断面図を描き、その描いたところに色紙に窓を開けたものをあて、その見える部分を拡大して描いているところです。昨年仙台の小学校の生活科の時間に実施したもの。日本人の子どもは正確に描こうとします。



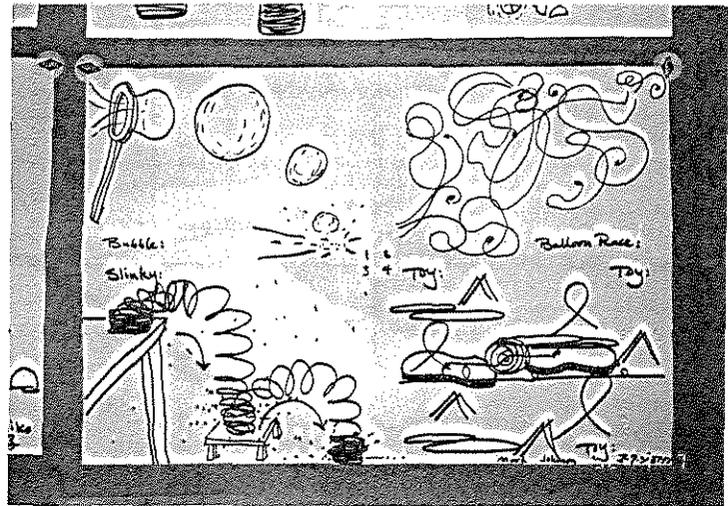
スライド 1



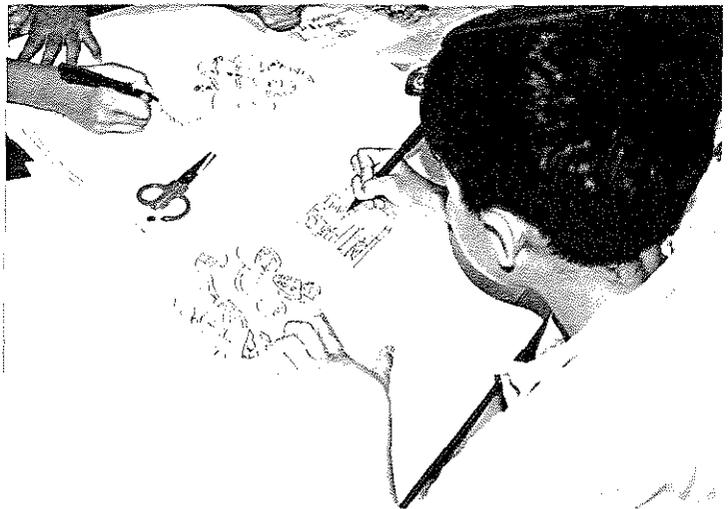
スライド 2

スライド3:同様に「概念の視覚化のための演習」ですが、動くもの(しゃぼん玉の一生・風船の大競争・ジャぱらの動き・ぜんまいで動くおもちゃの中の仕掛のイメージ)を視覚化する課題です。スライド4:「ねずみの家の設計」という課題で、バブルダイアグラムを用い建築家がデザインをするときにたどるのと同じ様なデザインプロセスをたどる。失敗はトレンシングペーパーを描いたものの上に重ね、修正していきます。

スライド5:「開発と自然」の問題を考えさせる題材例です。色紙を丸く切ったものを自然に見立てて、開発行為はじゅうたんの上に模型を張り付けたものを用い、自



スライド 3

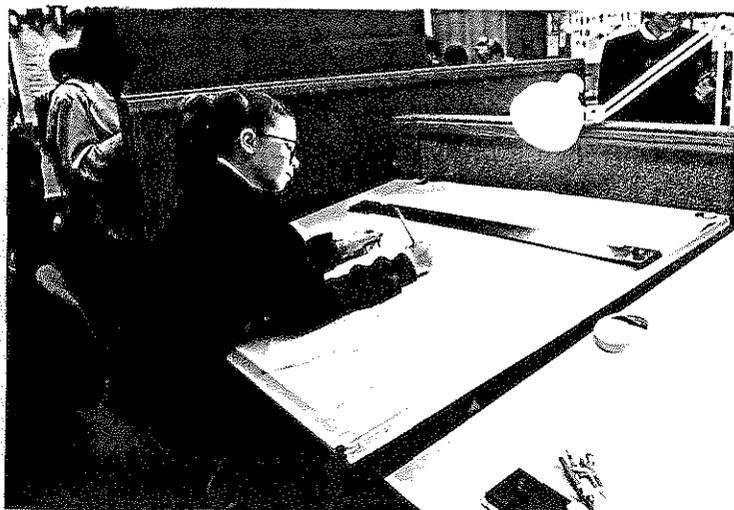


スライド 4



スライド 5

然の中においていき(その場合、気象条件、都市の望ましい条件などを配慮していく)、じゅうたんを置いた場合には丸い色紙をとりまます。つまり、自然を破壊していく事に結びつく行為をしていることを学習させる方法となっています。色紙などの作成はボランティアの方が行っていました。



スライド 6



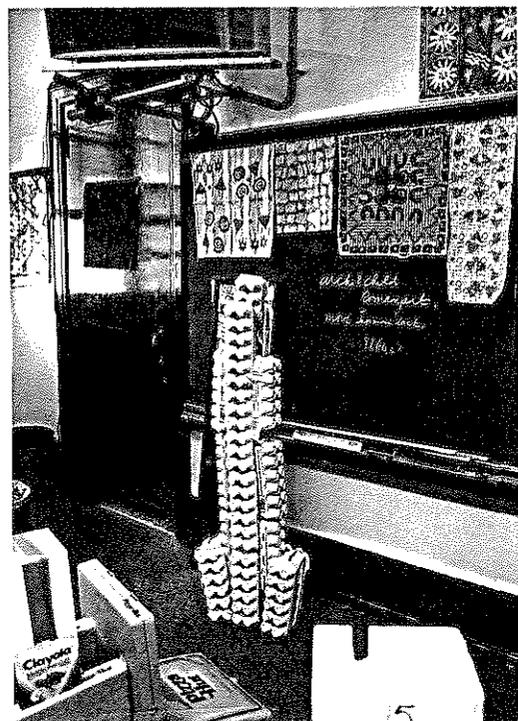
スライド 7

スライド6・7：小学校4年生が「学校の中庭のデザイン」をしているところです。T定規の使い方は実際に建築家の方が指導して下さるそうです。図面を引くだけでなく、居住地の植生にあった樹木や花を図鑑から調べ、粘土で実際の形をつくっていきます。一緒にやっているおばあさんはボランティアの方です。

スライド8：中学生の「超高層のデザイン」の学習です。シアトル市内には多くの超高層の建築物があります。カウンタイルで実際に建築家からそのデザインコンセプトを学ぶだけでなく、さまざまな材料で模型をつくりながら超高層にはトラス構造が必要であることを学びます。

スライド9：「インテリアデザイナーになろう」という題材で、日本の小学校6年生の家庭科の時間に実践したものです。床、壁、天井の材料、照明器具、家具、壁に掛ける絵画などをあらかじめ数種類用意しておき、それを選択していくという学習方法ですが、男子の方が活発に自分の意見を述べ、インテリアにおける日本の子どもたちの豊かな感性を知ることができました。一般的、高校生くらいがインテリアに興味を持つようにとられていますが、低学年から感性を磨く内容の題材を教育に取り入れて行くべきではないかと思いました。

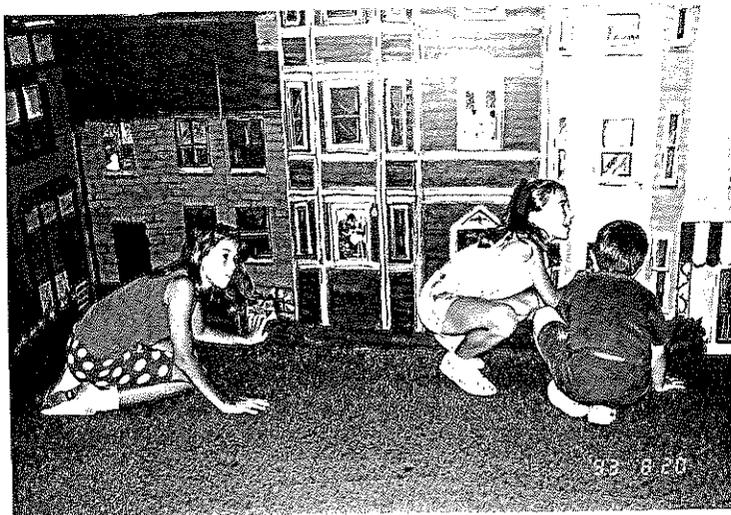
スライド10：ボストンの子ども博物館内の「人形の家」のコーナーで、子どもたちは人形の家断面だけでなく外側からも窓を通して家の中を見ることができるよう展示されています。



スライド 8



スライド 9



スライド 10



スライド 11

スライド11: シアトル市内を建築歴史家にアメリカの小学生にすると同じように案内してもらい、建築物やまちのデザインコンセプトやその具体的な形を見ていくタウントレイル学習です。シアトル市の歴史がデザインコンセプトにどう取り入れられているかなど、興味深く、3時間程歩きました。ワークショップを受けた学校の先生方は日本にはない体験型学習方法に感嘆の声を上げておりました。



講演する小澤紀美子さん

小学校での子どものための建築教育

講演 アス デザイン アソシエイツ代表 建築家 山口 明宏

僕は小澤先生のお話を伺わせていただいて、アメリカは僕のやりたいことをみんなやっているな、素晴らしいな、という感想を持ちました。

まず、僕が小学校に建築教育ということに入っていったという動機をお話します。以前、労働省の絡みで、職業訓練校といわれた（今は名前が変わって、東京都では高等職業専門校、神奈川県では高等職業技術校という）職業学校がありましたが、6年位前、神奈川県「いちよう計画」を基に、労働省の学校を統廃合して、建築関係業種を集めて建築の学校をつくる時に、僕に講師をしてほしいとの声がかかり、神奈川県に今ある2校の中の1つの建築専門の技術校で、デザインの先生をやらせていただく機会を得たわけです。

その生徒さんというと語弊があるのですが、中学卒業生から定年退職された方までがいるわけです。皆さんは、もちろんプロになるために学校にきます。半年コースと1年コースがあり、短期間に建築の設計者を育ててしまうわけで、コース修了後、地元のハウスメーカーとか工事業者、設計事務所に就職して行くのです。就職を前提に、ただで教えるわけです。税金を使いまして、無料で建築のデザインが勉強できるわけで、こんなメリットのある学校なのですが、意外と社会に知られていないようです。

15、6才の子どものと、60才以上の人とを同じ対象として建築を教えるというときの戸惑いはすごくあったのですが、半年たち、1年たち、教えていく中で、自分には腑に落ちないところがどんどん出てきたのです。それはどういうことかといいますと、授業をやっていて、中卒の子どもも、20代、30代、40、50、60代の人たちすべてに共通の認識というのでしょうか、例えば環境認識とか、建築のデザインとか、まさに部屋の大きさとか生活の仕方という感覚が意外とないのです。

技術校では、「自分の家の設計」という課題をやります。その時一番感じるのは、10代から20代初めの、特に男性に意外と生活感がないのです。その次には、定年退職した男性の方で、頭がかなり固く、僕らがテーマを出しても柔軟に対応しようとする力がないわけです。面白いのは、40代から60代の専業主婦の方たちで、家事の他にカルチャーセンターなどのためか、意外と柔軟にプランニングしてきます。一番柔軟なのは、30代、40代辺りの仕事を持っている女性です。家を建てようかと思っている年代ですし、社会に出ていますので、いろいろな情報量も豊富です。彼女らは住環境とか住まいに対する認識が高いようです。先ほど小澤先生のお話の中で、小学校4年生でも図面を書いているということがありましたが、あの4年生のような認識の仕方というのは、中学校を卒業した子どもも、50代、60代の方たちも意外とないのです。

逆に、面白いことに、小学校1年生くらいの子どものたちの立体に対する認識というのは素晴らしいのです。低学年ほど立体を認識しているのです。それがどうい

わけか僕の学校にくる10代から20代初めくらいまでの生徒たちにはどうもない。それで、僕もいろいろ悩んでしまっていて、どうしたらいいものか、教え方が悪いのかと現場の先生方といろいろ話している中で、考え方が柔軟な子どもの頃からの住環境教育の体験がまったくないからだということに気がついたのです。しかも悪いことに、子どもの時の感性も失われてしまっていて、それまでの教育がマイナス面に働いてしまっているのです。

僕自身は、建築学会での住環境教育の動きを、全然知らなかったのですが、以前からいろいろな方に小学校での住環境教育の必要性を主張していました。昨年4月1日の小学校に生活科というシステムが始まる少し前に僕の話に耳を傾けてくれていた大磯町立国府小学校の校長先生から、一度ぜひやってみないか、という話がありました。校長先生は、まず6年生の家庭科の中の「住まいと環境」という時間を見つけ、その時間の講師として僕を小学校に呼んでくれたわけです。

事前に現場の先生方と何度も話し合い、内容がまとまりまして、第1回目の授業をやった訳です。この時の写真をとってありますのでご覧ください（写真1）。この小学校は、建築関係の方でしたらご存知でしょうが、都立大学の長倉先生が基本構想を作られた学校で、新しくオープンスクールとなって始まった年の授業の風景です。何をやったかということ、僕は大きめにイメージしたので、目の前が海なのです。それで海の波からイメージした家の模型を見せましたら、子どもたちは結構喜びました。その他たくさんの模型を使って話をするのです。オープンスペースを使って話をするのです。オープンスペースを使った授業で、200名近く一緒に、いろいろな建築や住環境についてのよもやま話をやり、最後に授業の感想や質問を書かせます。その中に僕に対する質問がすごくリアルに返ってくるのです。

今、僕の子どものも2年生と5年生で、この学校にお世話になっているのですが、仕事を見せるということが子どもにとってすごく刺激があるのです。僕は、建築家としての立場でこの小学校に招かれましたが、その他に工



写真1

業デザイナーの方やサッカーのコーチ、手話の指導者など多くの方たちが昨年度で145名、この小学校にボランティアとして登録されています。このボランティア制度で国府小学校が話題になりまして、テレビや新聞などで大きく取り上げられました。僕の授業などもいろいろ取材され、今年の3月1日の「朝日新聞」にも授業風景が載っていますので参考にして下さい。

このように、小学校には取材のために、マスコミ関係の方々がたくさんこられます。そこで校長先生と僕が話している内に、世の中の人たちをみんな授業に使ってしまったらというアイデアが出てきました。例えば、テレビで取材にきたレポーターとか、カメラマンとか、みんな一緒に授業に取り入れてしまおうというわけです。カメラマンになるにはどうしたらいいの、とおじさんに質問したり、撮影現場での仕事を見たり、その場ですぐモニターに写し出された画面を見ることにより、どのように撮ったか、撮られたかもわかります。この仕事を見るという刺激は、子どもにとって遊びより、もっと楽しいことです。

僕の授業の中で、建築の仕事による刺激をどのように発展させていくかという、子どもたちが書いてくれた感想や質問など、僕に対するメッセージをまとめ、Q&Aの形式で答え、後日、先生を通じて子どもたちに渡してもらいます。中には、「おじさん、建築家になるにはどうしたらいいの?」と事務所に訪ねてくる子もいるのです。そのために、子どもたちに渡す答えのプリントにはわざわざ僕の事務所までの案内図まで付けて、電話番号まで書いてあります。「おじさん、弟子になったら、ボクも建築家になれるかな」とか……。

生活科の1年生の授業の後は、絵を書いて貰いました。何もない紙だとむずかしいので、目安になる四角の形を書いた紙を渡しました。この時の絵は約160枚あるのですが、誰も平面を書いていないのです。みんな立体で3次元を書いているのです。これはすごいなと思いました。みんな、おうちの絵を書いてくれて、個性的で楽しい絵

ばかりでした。(図1)

小学校の話から離れますが、今年の8月に、横浜市の泉区で、「子どものためのまちづくりスクール」を4日間の日程で行いました。内容としては、今まで小学校で行った住環境の授業を発展させたものなのでお話しいたします。

4日間の中で、模型の家を造り、子どもたちの造った家を使って、未来のまちをつくるには、どのような建築的レディネスを行っていくか、泉区の建築課の皆さんとの話し合いの中で生まれたのが、今回のカリキュラムです。アメリカで行われているようにシステマティックではないですが、何もないところから手探りで考え出したものなのです。そして、このスクールのテキストとして作ったのが「未来のまちへのパスポート」で、この中には、4日間の活動内容や記録の他に、写真や図面のコピーが貼り込まれ、完成したパスポートを手に、子どもたちが未来のまちづくりの旅に旅立つという意味で、この名前が付けられました。

1日目は、「まちなみ探検隊」でバスに乗ってのタウンウォッチングです。横浜市泉区の中で、緑園都市のような新しいまちや、畑や田んぼが多く残されている三家のようなところを、それぞれ「生まれたばかりのまち」「長生きのまち」と名付け、特徴がよくわかるようなモニュメント探しゲームを子どもたちと一緒に楽しみました。僕も子ども8人のグループのリーダーとして、実際に歩きまわったわけです。

2日目は、「どんなおうちに住みたい」というタイトルで、前半は、いままで小学校でやっていた話とほぼ同じです。「世界おもしろ住まい」では、石山修武さんの三角型トラスで造った卵型の家とか、アメリカの建築家のバート・プリンスの昆虫に見える家を子どもたちに見せ、あとはミース・ファン・デル・ローエのガラスの家ヨーロッパの花が描かれた民家や、日本昔話に出てくるような民家、軟らかい木をくりぬいて家にしてしまうとか、そんな話が子どもたちに結構受けるのです。

もっと具体的な建築の話では、他人の作品を使うわけに行かないので、自分の設計した家を題材に使用し、タイトルは「平成のねずみ小僧」。なぜねずみ小僧かといいますと、昔のねずみ小僧は、困っている人にお金をば

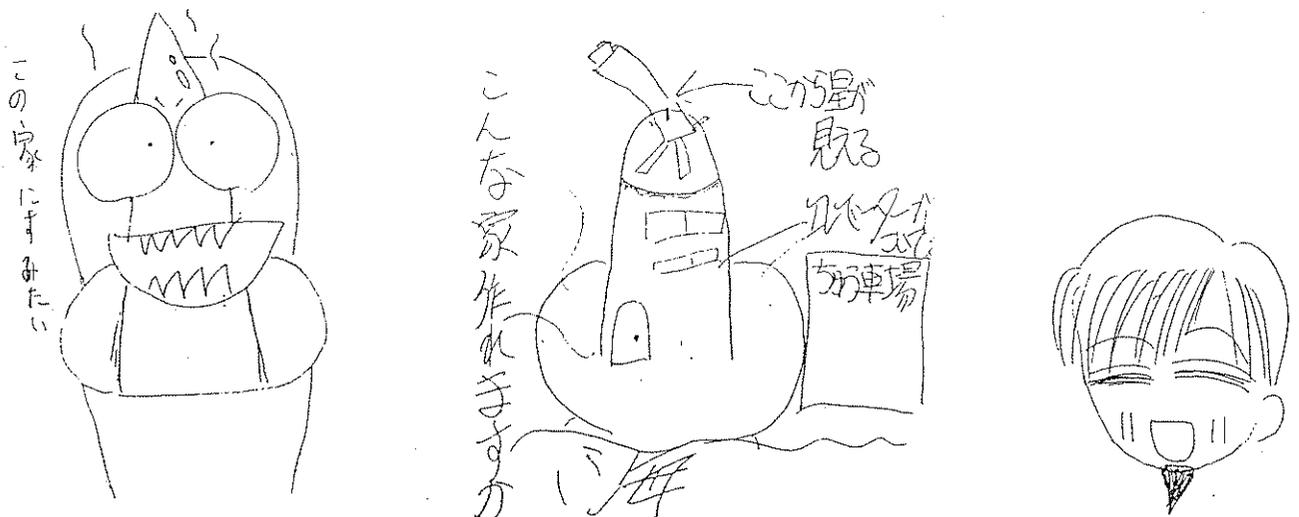


図1 子どもたちの書いたおうちの絵

らまいけど、僕は貧乏ですから土地が狭い、資金が余りない、だけど良い家に住みたいという人たちにアイデアをばらまくという話です。三角形の土地に三角形に造ってしまった家や、ローコストハウスなどの話です。

最後に、「宇宙船地球号の話」は、ペンシベニア大学のマックハーグ教授の地域計画の方法論が15年くらい前に日本に持ち込まれたとき、僕は丁度、大学で授業助手をやっていたが、その時の体験を生かした、子ども向けに優しくした地球環境の話です。小学校の授業ではお話の内容が面白いと、こどもたちが、わーっと騒ぐのですが、回りの先生がそれを静めます。泉区では、静めませんでした。子どもたちは、わいわい・がやがや騒いでいるのですが、後でアンケートを見ると、僕の言った話はきちっと認識しています。これはすごく勉強したなと思います。子どもはエネルギーがありすぎるから、騒ぎながら話を聞いているのだと、気がついたのです。

2日目の後半は、「君は今日から建築家」で、今までの探検隊や話に基づいて住みたいお家の絵を書かせます。子どもたちは、遊びながら聞いていた僕の話の中から、短い時間で自分たちのアイデアをスケッチしたのです。ここでの発見は、3日目の「作ろう住みたいお家」の模型作りの家（写真2）は、ほとんどの子どもが、この時のスケッチ通りだということでした。子どもたちは、かなり自分の意志通りに家を作っているのです。この時は、各グループに担当の建築家に付いてもらい、子どもの相談役をしていただきました。

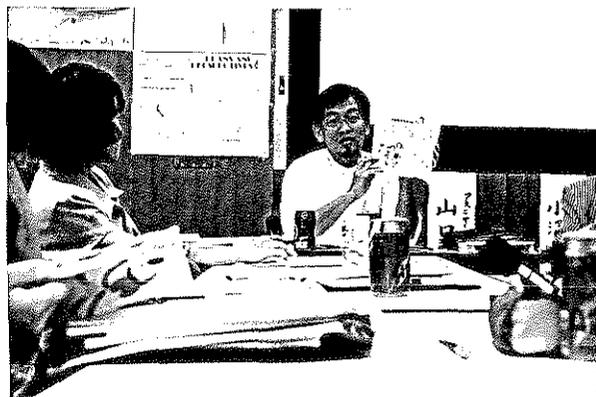
4日目の「まちづくりゲーム」のパスポートのページは、内容が何も書いてありません。内情をお話しますと、僕らもどうなるかわからない。でも、ここでは子どもたちと遊び、その中から子どもたちの持つ可能性を引き出そうと考えたのです。2チームに分かれ、それぞれの区画に木と川だけは設定しておいて、3日目に作った模型を置いて、自分達のまちを皆で話し合っって自由に作り、どっちがいいまちかを決めようというゲームです。



写真2

結局はどちらがいいなんて決まりませんでした。違いははっきりとわかりました。後でのアンケートの内容からみると、このゲームで子どもたちが今まで自分だけで認識していた家が、社会に出たときに、周りの人たちとの関係性や自然環境、そういうものに対する配慮が必要だということがかなりわかったのではないかと、僕らは自負しています。結果が出るのは、彼らが大人になって、まちづくりの策定委員会に入るとかする頃ですから、そういう時に僕らが話して種が育って、花が咲けばよいという気持ちでやっています。

住みよいまち・環境・宇宙船地球号は、乗り物で、壊れては困るわけです。個々の、1人ひとりの認識が社会の中でうまくサイクルして行けば、と思います。僕らは、自分たちの職域の大切さを話し、まちに入っていっても、小学校に入っていっても、ボランティアです。そういう人たちが社会の中でもっと増えていけば、より素晴らしい環境が出来上がるのではないかな、と思っています。



講演する山口明宏さん

質疑応答・意見交換

ファシリテーター 千葉大学 助手 木下 勇
筑波大学付属小学校 講師 町田万里子
記録・編集 跡見短期大学 講師 加藤 仁美
(3人共 財団法人 住宅総合研究財団 住教育委員会委員)

Q吉川 (防災都市計画研究所) 学校教育の中で住環境教育を行った場合、児童の評価はどうか。

A小澤 小学校1、2年生の生活科では、活動を重視するので評価はしない。アメリカのカリキュラムでも、その人がどういうコンセプトでその形を作ったのかを重視して評価する。コミュニケーション能力とか、他人の意見を聞く寛容さ、正しい悪いというのではなく、人の感性によってももの捉え方が違うのだということをもっと学校教育の場面で入れることが必要である。その基本が今生活科で取り扱われようとしている。ただし、そこにはカリキュラムの重要性和教える難しさがともなう。間違った教え方をすると逆効果になることがあるので怖い面がある。

Q定行 (成城短期大学) 建築家や専門家の試みを現場の学校の先生はどのように評価しているのか。

A大倉 (アスデザイン アソシエイツ・山口氏夫人)

1年生の授業は、2年間PTAの役員をやった先生方を説得する中で成立した。先生方は、建築や環境問題についての知識がほとんどないので、その必要性すら分かってもらうのが大変であった。

A小澤 「建築教育」としてしまうと学校では受け入れられない。「環境教育」として、その中に入れて考え、建築的な視点から環境教育の題材を示すことが、入り込む方法としてある。日本の先生は優秀なので、ちょっとしたヒントで教材組立てをやってくれる。

Q野村 (集合住宅デザインハウス) 学校教育と地域教育は継続して相互に交流できないだろうか。

地域から子どもと学校という三角形の関係の継続がとれないか、単発のアイデアではなくて、継続するような地盤づくりが大きなネックになるのでは。

A山口 週休2日制の1つの社会が子どもたちを教育していくシステムとして出来上がっていけば理想的だと思う。

A小澤 日本の組織のあり方や税制上の措置の違いがある。建築と子ども協会は、ノンプロフィット・オーガニゼーションで、全米1、2と言われる設計事務所のオ

フィスを借りて、学校の先生が研修を受けられる。シアトルで町中を案内してくれた人には、参加者もお金を支払っていて、ボランティアではない。

Q若松 (地域総合計画研究所) 欧米の住環境教育のシステムは、どのようなプロセスをたどって現在に至っているのか。

A小澤 イギリスには、住まいづくり、町づくりの長い歴史があり、郊外都市をつくる中で国民性の基本が形づくられた。67年にプラウデン・レポート(日本の教育課程審議会)では学校教育で環境を活用するよという答申が出て、69年にはスケペイント・レポートでピープル・アンド・プランニングという、義務教育で将来の市民としての資質を育てるということがうたわれている。これらを受けて、民間のTCPA(日本の田園都市開発協会)やシビック・トラスト、ナショナル・トラストとレディング大学の環境教育担当の所などがネットワークを組んでやっている。スクール・カウンセル(日本の教育委員会)

では教材も売っていて、学校の先生の研修もやり、地道な基礎をつくっている。また、イギリスには住んでいる地域にプライドを持つという発想がある。民度の違いというのかわからないが、学校教育だけ、あるいは地域だけで頑張っても駄目だろうと思う。

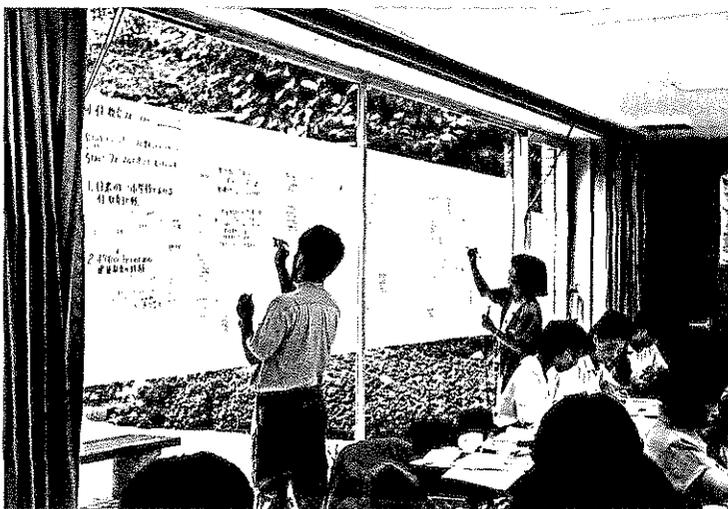
A森田 (国際航業) フランスでは、10年前には実験教育のようなものがされていたが、一般に広まってはいないようだ。ただし、今ある町並や町の空間自体が住んでいる人を教育していて、その中で造っていいものとそうでないものの区別が自ずと分かってくるようになっていく。日本の東京の郊外で訳のわからないものがどんどん建っているような環境で育ってきたのと、やはり感覚的に相当評価の仕方が違ってくる。自分を囲んでいる環境自体の力は、無視できない。

Q(不明) 町中ウォッチングで示されたような共通したコンセプトを形成することを可能にしたアメリカの建築教育とはどのようなものなのか。

A小澤 基本に風土と建物ということがある。それが一般的な建築の歴史家が見て説明できるくらいに議論されている。NBBJという建築と子ども協会が造った建物がいくつかあるが、十数年かけて議論しながら模型を提示しながら造ったものである。モジュール1つ、窓の寸法等きめ細かなデザインまで、1つ1つほかの建物との調和を考えながら設計されている。それ以外のことをやると社会から拒否されてしまう。建築家が好みでデザインしているわけではない。自分たちの概念や考え方や価値というものをどう伝えていくかという教育をものすごくしている。そこで合意を得たものが形になっていく。それが、日本の教育に一番ないのではないかと。価値の対立などは一番避けてきた。みんな建築雑誌を見て真似をしてなんとなくお茶を濁してきた。

Q森田 住環境に対する生徒の評価について育った環境はどの程度影響するものなのか。

A小澤 調査によると、環境という言葉に対して、国立(くにたち)の戸建て住宅に住む子どもと横浜の洋光



ファシリテーターがどんどん記録していく

団地に住む子どもの描いてくる絵は全く違う。団地の子どもは、遠くにみえる空とか山しかとらえていないし、木造住宅密集地の子どもたちは、自分の家から学校へ行くまでのルートしかとらえていない。国立富士見台の子どもは、駅までを自分の空間範囲としてとらえている。育った空間の影響はあると考えている。

Q妹尾 (自由の森学園) 授業の中に色々な分野のプロが入るのは良いことだが、授業にはねらいや子どもに考えさせたいこと発見させたいことがあり、効果的な投げかけなどは教師の方がプロであるはずなので、長所と短所を踏まえた上でやっていくべきではないか。

A小澤 子どもたちを使って一過性のイベントで建築家が入ってやるというのは、私も大反対である。子どもは実験材料ではない。教科の中でねらいを持って、題材をどう活かして、子どもにどういうレディネスを与えて、どう発問してどういう効果を達成しようかというのは、現場の先生に任せるしかないと思う。やはり基本は、教えるプロに任せるべきだと考えている。

A山口 あえて教育の場にまで入り込もうという気持ちはなく、先生と子どもも啓蒙する立場の中で何かをやっていきたいなと思っている。それですら小学校の中に入っていけないという現状を悲しく受け止めている。

Q吉川 学校とか先生が地域とか自分の住んでいる町にイメージを持っているか、自分の学校の環境について少なくとも子どもの視点で何か発言して、それで周辺の人たちと一緒に環境づくりをするということがあまりにも少なすぎるのではないか。

Q梅津 (太子堂まちづくり協議会) 太子堂では、子どもの感性を町づくりの中にどう活かしていくかという

ことでいろいろな方法でやってきた。実際に町づくりをやっていて継続してどうやっていくかということになるとうまくいかない。アメリカなどでは、高校生になるとボランティア活動を義務づけている。先生たちが地域の町づくり活動に参加することによっていろいろなことが分かってくるだろう。

Q田代 (日本女子大学) 住居学科において教員免許を取ったが、他学科より教職のカリキュラムを取るのが大変であった。採用試験にはカフスを1時間で作るという実技などもあり不利を感じた。採用の段階でも住居分野の採用は少ない。これから高校で男子に家庭科を教えるということで、これまでできなかった住居がだんだんできるようになればいいなと思っている。

Q吉村 (東京電機大学) 建築というのは総合的にものを考える。文化や風土などを学んでいるのは建築関係や都市という領域をかじっている人である。建築学科で教員になれるのは、数学か理科である。住居が家庭科の教員になりにくいということも含めて、建築を勉強した人がそういう教育に対して関わりを持てるシステムややり方はないのだろうか。

A小澤 高校で家庭科を男子も学ぶということで、ものすごい地殻変動が起きている。小学校では全科の教員を探り、中学校で家庭科専任を探る。学校の先生が地域の実態を知るということが少ない。やはり地域に入り込むということを学生時代から教えることが必要だろうということで、私はなるべく学生を地域の住まい、町づくり運動にかかわるように研究室から追い出す作業をしている。

第1回 住教育フォーラム '93. 9. 16 (木)

住まいをめぐる教育フォーラム、住教育フォーラム会場 (住居塾)
 今日: フォーラム会場はどうなっているか?

1. 日米のおけ小学校における住教育比較

- 1) 日本では 学習指導要領
小・中学校 家庭科 保健体育 環境教育
- 2) 米国・建築と子ども ARCHITECTURE & CHILDREN
Children's Museum
親も参加する(教える場) 体験学習

2. 小学校での子どもための建築教育の経験

- 山口まじさんのここが良かったQ&A
 オープンな作家 etc. 絵がぬいたり
 社会との関連を見ながら学ぶ... 子どもの反応が
 平成のおすけ小学校 感性を呼び出す
- (1) 国府小学校での授業
 - (2) 横浜の社会教育でのまちづくり学習(4日間)

学校教育では

◎ 生活課科 評価しない
 人の感性でいろいろ考え方を違う
 先生の受け方 山口さんのお洒落自然条件

◎ 公園 はらけ

先生と根まわす役 家内さん
 PTAの役員として知恵
 6年生でやってみて おもしろい
 学校探検は1年生へ
 校長先生、先生に交渉
 先生のボランティアがなかった
 大人に知らせる、生い立ち
 刺激と反応を見よう調査
 PTAでP&A 団地 建

◎ 建築出身 総合から理科
 のより評価がはきりしないから
 教師になりにくい
 若い人も
 家庭科を
 教えるように

ファシリテーターの木下勇さんによるグラフィックス



討議のまとめ

司会 熊本大学 教授 延藤 安弘

(財団法人 住宅総合研究財団 住教育委員会委員長)

学ぶことの多いひとときでした。今後に備えて、主な論点を整理しておきましょう。

1. 学ぶ対象として、建築・環境の力に着眼しよう。そのことで、建築・環境の総合性からいって、縦割りの教育を、横割りにすることが可能となります。とともに、建築・環境から学ぶことは、それらの質の状況を問わず、子どもたちが「まち」を学び舎とし、批判的眼差しを養うとともに、楽しい活動の中で想像力を豊かにできる土壌を育むことを意味しています。
2. 学ぶ仕掛けとして、固定的なものではなく、柔軟かい多面的な学習プログラムを大事にしよう。在来的な分断された知識偏重型の教育ではなくて、包括的な楽しい体験学習を積み重ねる中で、一人ひとりの子どもが、内に隠し持っている感性や想像力の翼を開かせる仕掛けの工夫が大切です。
3. 子どもを評価の対象にせず、住まい・まちづくり学習のありようを考え、そのことに向かって行動する大人世代の責任が問われるべきではないでしょうか。
4. これらを具体化する中心的課題の一つひとつとしてのカリキュラムの開発、プログラム開発の視点は4つあります。
 - ①わくわくする予感のあるプログラムづくり
 - ②楽しいアクションの仕掛けに満たされたプログラム
 - ③楽しい活動の積み重ねの中で感動したことを表現し発表すること。
 - ④たゆまず工夫を重ね、状況に応じて、発達・成長し続けるオープン・エンドなプログラム開発を行うこと。
5. 学校と地域が相互に呼吸し合えるような関係づくりを大事にしよう。学校側からのオープンスクールの仕掛け、地域側から、PTAの側から住民や父兄が学校教育に参加するなど、双方のうまい響き合いの関係づくりが大切です。
6. 教師と専門家が、それぞれの職能を生かしつつ、住環境学習をめぐる、相互乗り入れを図り、これらがより豊かな職能を双方から構築していくプロセスを追求して行きましょう。
7. 専門家が学校教育に参加できるためには、ボランティアのレベルにとどまらず、仕事になり得る状況づくりが必要です。そのためには、例えば、住環境学習のNPO(ノン・プロフィット・オーガナイゼーション)が地域でどのように成立するのかについて、考察と実践を重ねて行きましょう。

*

*

全体として、この課題が各方面から注目を集めているまことに重要な内容であることが、ひしひしと伝わってきました。これから機会あるごとに、これらの課題及びここに書ききれなかった当日提起されたいろいろな課題を深めていけたらいいな、と思いました。

住むことへの思いやりの心を 次代のよき住まい手と作り手を育む

フォーラムの開設に当たって

当財団では、この度、標記のフォーラムを開設し、新たな活動を開始することといたしました。よろしくご協力のほどお願いいたします。

思い起こしてみますと、われわれ日本人は、第2次世界大戦後、急速かつ大量安価な住宅供給のニーズのなかで、いとも安易に古来からのモジュールによって支えられた日本間と、そこに展開される生活習慣に訣別すると同時に、住まい方に対する規範を失ってしまいました。

家の中での作法や禁忌は、省みられることなく、経済最優先の社会構造、家族や家庭の機能の変化は、住まいや近隣、あるいは地域に対しての敬虔な態度を、ともすれば忘れさせてしまいました。その結果、この約半世紀という時間は、日本に経済的な繁栄をもたらしたものの、地球環境や精神世界で、取り返しのつかないほどの大きな荒廃を生み出しつつあるともいえます。

残念なことに、次代を担うべき子どもたちの住まいに対する親密な気持ちや慈しみの心もまた、いつの間にか失われてしまいました。「住まい」とは、当然、住宅だけでなく、任んでいる・暮らしているところ全て、まさに社会や環境そのものです。社会の中で個人が、市民としていかに住まうのか、さらには、家族や近隣・地域を含めて人間としてどう生きていくのか、住まい=社会=環境と人のあり方を幼いときから生涯をかけて、学び直す必要が痛感される次第です。

本来の人間としての思いやりの心と心豊かな暮らしを取り戻し、次代のよき住まい手と、よき住まいの作り手を育むことが、今こそ問われているといえます。このフォーラムが、皆様のご支持を得て少しでもお役に立つよう願ってやみません。

・なお、このフォーラムは、当財団の住教育委員会によって企画運営されています。次の皆さん方を委員にお願いしています。

委員長	熊本大学工学部建築学科教授	延藤 安弘
委員	東京学芸大学教育学部家庭教育学科教授	小澤紀美子
〃	千葉大学園芸学部助手	木下 勇
〃	跡見学園短期大学家政科講師	加藤 仁美
〃	筑波大学付属小学校講師	町田万里子

1993年8月23日

財団法人 住宅総合研究財団
専務理事 大坪 昭

住・まちづくりフォーラムかわら版(仮題) 1

1993年11月20日発行(非売品)

発行人 大坪 昭
発行所 財団法人 住宅総合研究財団
〒156 東京都世田谷区船橋 4-29-8
電話 3484-5381・FAX 3484-5794

